

The Japanese Journal of Child Care and Support

子ども支援研究

第4号
2022年10月

実践報告

- 宮川 隆史 先進的な特別支援学校の現場から
成澤 布美子 体験から学ぶアプライド・ドラマ
—応用演劇ワークショップ実践報告—
川崎 佳子 ことばのキャッチボールで変容していく1年生
—支援員としての関わり—

論考

- 深谷 昌志 子ども像の考現学(1) 子どもの遊び
瀧口 優 子ども食堂を考える
—コミュニティづくりの柱として—
市原 潤 小林一茶「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」を読む

Book Review

- 金城 悟 青葉紘宇 「継ぎ^つ接ぎ^は家族」を楽しむ
-

日本子ども支援学会

The Japan Society for Child Care and Support

目次

実践報告

先進的な特別支援学校の現場から	3
副校長マネジメント支援員 宮川 隆史	
体験から学ぶアプライド・ドラマ — 応用演劇ワークショップ実践報告 —	6
演劇表現活動家 成澤 布美子	
ことばのキャッチボールで変容していく 1 年生 — 支援員としての関わり —	8
子ども支援士 川崎 佳子	

論考

子ども像の考現学(1) 子どもの遊び	11
東京成徳大学 名誉教授 深谷 昌志	
子ども食堂を考える — コミュニティづくりの柱として —	15
白梅学園短期大学名誉教授 瀧口 優	
小林一茶「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」を読む	18
元長野県立高校長 市原 潤	

〔日本子ども支援学会ワークショップ一覧〕	24
----------------------	----

Book Review

青葉紘宇「『継ぎ ^つ 接ぎ ^は 家族』を楽しむ」	25
東京家政大学 教授 金城 悟	
編集後記 紀要編集委員会 委員長 市原 潤	26

実践報告

先進的な特別支援学校の現場から

宮川 隆史

(副校長マネジメント支援員)

1 はじめに

海外の日本人学校勤務を終え、都立α学園（特別支援学校）で、副校長の業務補助を行い3年目に入りました。肢体不自由部門（小中高）と知的障がいのある生徒対象の高等部就業技術科の二つの学校が一つになったような学園ですが、ここでは就業技術科の様子についてご紹介します。

2 就業技術科の概要

東京都の知的障がい部門の高等部には「普通科、職能開発科、就業技術科」の3種があります。知的障がい部門の高等部の主たるミッションは、「自立支援」と「就労支援」ですが、大雑把に言うと「自立支援」の色合いが強いのが普通科で、「就労支援」に特化しているのが職能開発科、就業技術科です。普通科には入学者選抜がありませんが、「職能開発科、就業技術科」には入学者選抜があって、選抜された生徒が入学することになります。「職能開発科、就業技術科」のコンセプトは基本的に同様ですが、「就業技術科」にはパイロット校として、より充実した施設・設備等施策的に優遇されている面があります。

「就業技術科」への応募資格は、知的障がいがある者（愛の手帳の所有者、または医師から知的障害があると診断された者）で、卒業後、手帳を使って障がい者枠での就労を目指す者となっています。そのディプロマの内容は、自立した社会人、職業人となるための資質・素養と基本技能を身につけることで、すべての教育活動が、このディプロマに向けてプログラムされています。教科の授業も実施されていますが、高等学校的な視点でいえば、すべてのカリキュラム

ラムを通じて、徹底的に就労準備教育を行っているイメージになります。

α学園の場合、職業に関する教科は、流通サービス系列（ビルメンテナンスコース/流通・都市農園芸サービスコース）、家政福祉系列（「食品加工コース、介護・コミュニケーションコース」）の2系列4コースがあり、事務・情報処理の学習が実施されています。最初に全コースの授業を体験し、2学年からは系列を選択、2学年後半からはコースを選択と、徐々に専門性を高めながら、授業数も1学年で週2日、2学年で週2日半、3学年で週3日のように、段階的に増加していきます。そして、事務・情報処理の学習は、所属コースに関わらず、全員が3年間しっかりと学ぶ、言わばハイブリッド型の学習システムをとっています。これは、卒業生の実績として、半数以上が事務一般職としての就労となることによります。これも、徹底して卒業後の具体的な就労に備えるとする、カリキュラムマネジメントの現れと言えるでしょう。

3 徹底した就労準備教育

上記の4コースに合わせて、実習施設・設備が校内に整えられ、実務的な体験実習が日常的に行われています。

「ビルメンテナンスコース」では、校内全てが実習施設になります。十分な清掃用具が備えられた準備室には4S（整理・整頓・清潔・清掃）の合言葉が掲げられ、日々学校中の床、壁、窓をピカピカに磨き上げるトレーニングが行われます。また、近隣の公共施設等の清掃も請け負い、授業時間内での出張実習も行われています。

「流通・都市農園芸コース」では、バックヤードを模した実習室や農園、校舎外部の花壇な

どが実習施設になります。また、運送会社やスーパーへ出向いてのバックヤード実習も日常的に実施されています。

「食品加工コース」では校内にある本格的なカフェ施設を使って、ランチオープン、デザートオープンなどの営業が、保護者や地域住民対象に実施されます。しかし現在はコロナ禍のため、校内の教職員を主な対象として年数回実施しています。ランチオープンでは、ベテランのシェフの指導による本格的なランチコースが、接遇のベテラン講師の指導によるホールスタッフによって提供されます。また、コロナ禍における工夫として洋菓子とコーヒー紅茶をワゴンサービスする校内教職員対象の営業活動も行っており、時には「都市農園芸コース」で収穫された野菜や草花の販売なども行われます。

「介護・コミュニケーションコース」では、ベッドや車いす、洗濯設備などを備えた介護実習室や、ビジネスホテルの客室を模した実習室で実務実習が行われます。また、地域の高齢者施設と連携した様々な実習も行われています。さらに、今年度に入り学校説明会等における来校中学生・保護者等の会場・座席への案内業務も実習の一環として行われるようになり、来校者から高い評価をいただいております。

企業就労に向けての就業体験・現場実習も、計画的に実施されています。進路指導部スタッフによって開拓された多くの企業やハローワーク等の諸機関の協力によって、1 学年では幅広い就業体験を経験し、2 学年からは「職域への挑戦」⇒「求人への挑戦」という流れで、個々の生徒の希望や適性に合わせた現場実習が実施され、この流れの延長線上で就労先を決定していきます。

これ以外にも「職業」「キャリアガイダンスの時間」という授業が3年間それぞれ週1時間実施され、職業人として、社会人として必要な知識や素養を学んでいきます。

4 入校見守りを通して-生徒たちの様子

都立学校にサーモカメラが配置され、すべての生徒の登校時の検温が行われるようになると、就業技術科240名の生徒のサーモチェックが、私の朝のルーティン業務となりました。当初はPCの画面を教職員側に向けて、「オッケーです。おはようございます」と一人ひとりに声

かけをする形でしたが、コロナ対応が長期化し、始業時間が早まった時点で、サーモチェックと手指消毒確認等に人員を割けなくなったこともあって、サーモチェックは生徒の自己チェックへと移行し、私の役割もそれらの確認を含めた「入校見守り」へと変化しました。

肢体不自由部門の生徒が通学バスや保護者の送迎で通学しているのに対して、就業技術科の生徒は、自分の力で、公共交通機関および徒歩で通学しています。実はこの事も生徒の自立支援という教育目標において非常に重要な要素となっており、サーモチェックの自己チェックへの移行もそうした教育的な意味を含んでいます。

この「サーモチェック/入校見守り」業務を通じて、「就業技術科」の生徒の様子を観察することができます。かなり多くの生徒は、かつて私が勤務してきた都立高校に通学していても全く違和感がありません。倍率を割っている都立高校が多い現状では、彼らはそうした都立高校への進学を選択することもできたと言えます。

それに対して、様々な障害特性に基づく行動を示す生徒がいます。靴を履き替えるという行為に時間のかかる生徒、一度教室に向かった後再び下駄箱に戻って確認することをルーティンとする生徒、あいさつの後に、必ずその日の天候などについてのコメントを伝えようとする生徒、雨天時に決められた自分の傘立ての所定の位置を探すのに長時間を要する生徒、毎日山のような荷物を小さな身体で背負ってくる生徒、検温後私の方に向き直り、正対して丁寧に深く礼をしてあいさつをする生徒など、独特の個性や行動特性のある生徒も少なくありません。またこれらの行動特性のうち、履き替えに長時間を要した生徒がいつの間にかスムーズに通過していくようになるなど、短期間で大きく成長していく姿を日々確認することもできます。

5 徹底的に個を大切にす支援

α学園では1クラス10名が各学年8クラス、3学年で240名の生徒が定数です。これに対してクラス担任の他、2クラスに1名の副担任、各学年に3名の進路指導部担当者が配置され、クラスを持たない学年主任が全体を統括しています。さらに、スタッフ教員も含め60名以上の教員で、正に「一人ひとりに目が届く」体制

がとられています。

私が着任時に職員室に入って最初に目に入ったのは、進路指導部の先生方のコーナーにある、細かく区切られ付箋等がたくさん貼られた3枚のホワイトボードでした。近づいてみると生徒一人ひとりの枠の中に写真が貼られ、個々の行動特性などが書かれ、これまでの職場見学先、現場実習先等が整理されており、言わば就労に向けた個人カルテの簡素版が「見える化」され、全教員が共有できるようになっていました。個人情報管理上のことが気にかかりましたが、高校の職員室と違って、生徒や保護者、来客が自由に出入りできないことが徹底され、情報漏洩などが起こらないことが担保されています。こうしたカルテに沿って、個々の最終的な就労先の決定に至るシステムが出来上がっています。

6 部活動も重要なカリキュラムの一部

部活動も任意参加でなく、すべての生徒が一つの部活動を選択して3年間所属し、全教員および指導員の指導で、日々活動しています。このことはこの学校での部活動が、高等学校等の任意参加の部活動とは異なって、自立支援/就労支援のためのカリキュラムの一環であることを示しています。身体を鍛えたり、好きなことに熱中したり、情操を高めたりする以外に、個として自立し他者との関わりの中で、社会人、職業人として生きていくための人間力を、主に二つの意味で磨くことが目的であると考えられます。

一つには、先輩後輩関係も含め、他者と共に

一つの活動に取組み切磋琢磨し、また協同して成功・失敗体験を積み上げていく経験の中から、人間関係力やコミュニケーション力を磨いていく事が期待されています。

もう一つは、校訓である「継続は力なり」を、3年間一つの部活動を続けるという形で体現していく経験です。もちろん、サッカー部のように全国大会常連となり、過去に全国制覇も成し遂げている面もあります。

7 おわりに

その他にも、生徒指導面や相談体制、学校行事など、生徒一人ひとりを大切にした教育活動が日々展開されている学校ですが、こうした徹底した取組みを可能にしているのは、このタイプの学校が、東京都の特別支援教育のパイロット校であって、非常に恵まれた学校であるからということも付け加えておきます。また、教職員一人ひとりが個々の生徒の成長のために、教科の専門性にかかわらず、多面的な業務に真摯な姿勢で取組み、きめの細かい指導を日々実践していることも特筆できます。ただ、そのことが教職員の過重労働に繋がっていないかを常に点検・確認することも忘れてはならないと思います。

今、都立の進路多様な高校の多くが、都民から選ばれにくい状況が続いており、残念に思うと同時に、その改善策の実施を期待していますが、こうした特別支援パイロット校の「徹底的に個を大切にした教育活動」から学ぶべきことが少なくないと考えております

[目次へ](#)

体験から学ぶアプライド・ドラマ

— 応用演劇ワークショップ実践報告 —

成澤 布美子
(演劇表現活動家)

1 くはじめに>

子育てとアプライド（応用）・ドラマ（演劇）

以下は、自分の子育てにアートを活用した実践者としての言葉と受け止めて頂ければ有難く思います。

フリーアナウンサー、放送作家としてのキャリアから、子育て中に人形劇作りを始めたのだった。見てくれた子どもの笑顔が嬉しく、一緒に作っている仲間の子供達に励まされもした。子どもが何を感じ取ってくれるのか、真剣に向き合った時間でもあった。そこから親子で人形劇や市民劇、コンサートと一緒に作り上げる事業に取り組んだ。「子どもと大人の学び合い」の場所作りである。本格的に演劇を学びながら、自分の子どもの成長と共に表現活動も変化していった。子どもが中学生になれば、中学校演劇部の外部指導員となり、子ども達の抱えている問題にも直面する。「共生の心、多様性を受け入れる心を育むべきでは？」そう思ったのだった。

そこで出会ったのが「アプライド・ドラマ」、イギリス発祥のドラマ教育法である。物語の主人公が経験していく岐路から、三つの視点で物事を考える力・感じる力を養ってくれる、体験型演劇プログラムである。

一つは、主人公の視点。もう一つは、自分であったならばの視点。そして、他者の視点である。

例えば…絵本「スイミー」の主人公は、こんな体験をし、こんな行動をした。自分であったならば、どうする？あなただったら、どうかな？と問いかけ、グループで話し合う。少ない人数のほうが安心して話しやすい。ワークショップでは、ファシリテーターが、物語からプレ・テキストを作り、幾つかのタスクを用意する。タスクを出す場面は主人公の岐路。考えたその

気持ちや行動を表現する時、身体表現、絵画、工作など、様々なアートを用いて誘導していく。そして一番大事なことは、ディスカッション。

その場での答えはない。多様性から自分で答えを探していく過程が「学び」なのだ。

住んでいる地域、小劇場を持つ川崎市アートセンターで始めた月一回のワークショップ「アプライド・ドラマシアター」も、今年11月で5年目を迎える。小学生から70代までの市民が参加し、子どもと大人が学び合う場所になっている。そして、私の故郷である栃木県足利市でも、1年前から小学校や生涯学習センターでワークショップを始めた。私見だが、アプライド・ドラマは小学校高学年からが有効のように思う。その実践例をご紹介します。



2 絵本『スイミー』より

作：レオ・レオニー 翻訳：谷川俊太郎
プレ・テキスト：成澤布美子

〈場面Ⅰ〉

*絵本の読み聞かせ（ここでは、物語の要約）
お話を始めます。大海原の片隅に、小さな赤

い魚の群れがありました。その中に一匹だけ、真っ黒い魚がいました。名前はスイミー。ある日、赤い魚たちが大きなマグロに飲み込まれてしまいました。泳ぎが早いスイミーだけ、素早く逃げられ、海の深くに潜っていきました。

タスク① ディスカッションでのタスク

ひとりぼっちになったスイミー。ひとりぼっちになったと感じた経験はありますか？

二人一組になって、そう感じた時のことを話してみてください。

※ここで大切なことは『安心して話せる場所』であると参加者が感じてくれることである。

〈場面Ⅱ〉

お話に戻ります。しょんぼりしていたスイミーでしたが、海の底には面白い生き物が沢山いました。「うわぁ、すごい！友達になりたいな」スイミーは、そう思いました。

タスク② 身体表現でのタスク

海の底の面白い生き物、どんな生き物がいると思いますか？5. 6人のグループになって面白い生き物を作ってみてください。自己紹介して、「遊ぼう！」と誘ってみてください。

※大切なのは「想像力と身体表現」で、「グループでの達成感」が得られるようにすることである。

〈場面Ⅲ〉

お話に戻ります。元気になったスイミーは、小さな岩陰に隠れている小さな赤い魚たちを見つけます。「遊ぼう！」スイミーが声をかけると、一匹の魚が言いました。「大きな魚に食べられちゃうよ」スイミーは考えました。「そうだ！みんなで大きな魚の形をして泳ぐんだ。僕が目になるよ」群れで大きな赤い魚になった彼らは、冷たい朝の海を、昼の太陽が輝く海を、勢いよく泳いで行きます。彼らを食べようとする大きな魚たちは、寄っては来ませんでした。

タスク③ 自己啓発のタスク

お話は、これでおしまいです。スイミーは一匹だけ黒くて、なんだか仲間外れ。でも早く泳

げて賢い。だから、海の底の面白い生き物たちと仲良くなれました。そして自分の知恵で仲間たちを守れたのでした。でも、それは仲間たちがいたからでもあります。

では質問！「集団と個」、自分だったら、どちらをより大切に思うか、考えてみてください。

3 教育と演劇

ワークショップの最後のタスクは、会場の真ん中に線を引き、右が「集団」左が「個」(仮)とする。そして参加者に、自分が思う場所に立ってもらう。ここで気をつけることは、どちらも大切に思う参加者が多いので、「右寄り、左寄り、真ん中もある」という選択肢を、先に提案すること。そして、今立った場所は「今」であり、「未来」は変わるかもしれない、ということだけはしっかり伝えることである。

このプレ・テキストを最初に考えたのは、イギリスのチェスター大学名誉教授であるアレン・オーエンズ氏で、コロナ禍以前は毎年、日本でドラマ・ティーチャーのためのワークショップを開催してくれていた。アレン教授のプレ・テキストは、文字通り、前のテキストであり、それをどのようにでもアレンジしてくださいとの意味である。自分なりにアレン教授のテキストを解釈し、アレンジしたものが上記である。

4 おわりに

私は「教育と演劇」はとても相性がいいと思っている。どちらも過程が大切であり、時間の経過が必要である。海外とは違い、日本には「演劇・ドラマ」の教科はない。日本人の身体表現が豊かとは言えない背景には、「慣れていない」ということが関係しているように感じる。また、集団の中で「本音」を伝える力、「本音」の他者を理解しようとする力にも「慣れていない」ように思う。子ども達のまだ眠っている力を呼び覚まし、様々な教科に応用可能なドラマ教育法として、「アプライド・ドラマ」を広く知って頂きたいこと、そして自分の学びも含めて、今回、実践報告の機会をいただいたことを、心から感謝しております。

[目次へ](#)

ことばのキャッチボールで変容していく 1 年生 — 支援員としての関りの日々から —

川崎 佳子
(こども支援士)



＜ゆう君の最初の作品＞

1 気分にむらがあるゆうくんの作品が完成するまで

ゆうくんは気分にむらがあり、最後まで取り組むことが難しい子だった。

ゆうくんの絵は、暗い色、特に黒が多い。なぐり書きのようなタッチで、構成にまとまりがない。展覧会の作品に取り組んでいる今回の絵には、珍しく明るい色が使われていた。絵には真っ赤な塗りつぶしの箇所があり、「しっかりぬっているね。これはなに？」と、聞くと「山」と答えが返ってきた。

私はゆうくんと対話した。

「山には、ねんねしてる山、死んでしまった山、かっかと活きている山があるんだよ。

ここでもんだいです。富士山はどれだ？」

何を言っているのかと、首をかしげているゆうくん。

「富士山は、昔々、かっかとばくはつしていました。今はねんねしています。富士山はきれいだよね。今ねんねしている富士山のおなか

燃えているんだよ。ゆうくんはそのおなかを描いたのかな」

じっと聞いていたゆうくん。なにを思ったか、今まで描いた絵をくると裏返し新しい絵を描き始めた。

一度描いた絵とは全然違う雰囲気絵である。

頂上は、とがった形の真っ赤な色。その下はオレンジ。おなかには青を二色に使い分けた色彩。空には雲が浮かび、雲の近くにはゆうくんの好きな黒の彩色があるが、完成した作品には見事なまとまりが見られた。

新しい作品にはゆうくんのメッセージが込められている。安定感のある構図の中には草色の大地が描かれ、太い幹を持つ木のそばに建つ家の中には、両手を広げた楽しそうな自分自身が描かれていた。



＜書き直したゆうくんの作品＞

2 「どうぶつの親子」を制作したはるくん

はるくんは、一人、教室の隅のほうで、床に足を投げ出し、半分わめきながら、紙を小さくちぎって投げ散らかしていた。かんしゃくを起こしていたのは、制作が思うようにいかないからのようだった。

私は、はるくんのそばに座り、はるくんが投げ散らかした紙屑のしわを伸ばし、二つに折り、半月に切り、それをたくさん作り始めた。はるくんは関心を示さない。叫んだり、ぶつぶつ言ったりしている。私はその横で紙屑のしわ伸ばし、それを半月に切る作業をひたすら続けた。半月の形はその背中を押すと、ゆらゆらと揺れる。ゆらゆらとゆれる半月の形は、どんどん増えていき、私はそれを指さしながら、声をかけた。



＜紙屑から変身したはるくんの作品＞

「はるくん、すごいね。ゆらゆらゆれてるよ。」

きみも作ってみる？」

「やる！」と返事が返ってきた。「じゃあ、好きな色の紙をもってきていっしょに作ろうよ」

はるくんは、自分から好きな色の紙を取りに行き、そこからは機嫌よく作品作りに取り組んだ。

半月の形から、はるくんは「どうぶつのおやこだよ」と言いながら作品を完成させた。

3 納得して作品を完成させたりょうくん

りょうくんは、入学当初から先生の指示に素直に従えない、納得しないと前に進まない、うまくいかないと言くと泣くといった学校生活が続いており、お母さんは「納得するまで時間がかかるんです。」と悩んでおられた。

入学して初めて絵を描く日、4月19日。

四つ切の画用紙に「じぶんの好きな太陽をかこう」の作業が始まった。

りょうくんは、大きな画用紙の左隅のほうに、小さく太陽らしき絵を描いた。その右横にも四角の小さな太陽を描いた。気に入らないのか、左端の太陽を消し始めた。

私はすかさず「これはすばらしい。消したらだめだよ」と声をかけた。

ほかの子の作品を見回る間に、りょうくんの画用紙には、黒のクレヨンで「きさまはだれだ」との文字が。

担任から「字はだめだよ。」と注意され、手で消し、ティッシュで消す作業を始めた。

「消えないから水で消す！」と言い始めた。

画用紙の中心部は真っ白のまま。

今度は「新しく書き直す？」と担任に声をかけられ、突っ伏して泣き始めた。

私はりょうくんのそばに行って、白の紙に黒色のクレヨンで字を書き、その上を、紫、緑、青などで塗りつぶして、紫の丸の形、緑の丸の形、青の丸の形などに変身させていった。

「りょうくん、こうすれば字は消えるよ。黒い字が変身するよ」と言いながら、作業を続けた。なかなか乗って来ない。あきらめずに作業をしていると、やっとやる気になり、そこからは、誰の力も借りず、一気にやりとげて、太陽の絵は完成した。

出来上がった作品は、中央に紫色の大きな太陽。その周りには、その太陽を取り囲むように、黄色、緑、青、オレンジなど明るい色の小さな太陽が描かれていた。

こうして、「きさまはだれだ！」の黒い文字は消え、茶、紫、青の太陽に変身していた。

りょうくんは「先生、なんていう名前？」と私に聞いてきた。

帰りに「今日はいいい日」と私に言いながら、「えも、かけた。たいようも、かけた。きゅうしょくも、おいしかった」

と言った。

それ以来、帰りには必ず「さようなら」と声をかけてくれるようになったりょうくん。

1 年が経ち、3 月にお別れの手紙を子どもたちがくれた。その中にあったりょうくんからの手紙は、

かわさき先生へ

ずこうのさくひんをほめてくれてありがとう。ぼくがたいようのさくひんをつくっているときもじをかいちゃつたとき、かくすほうほうをかんがえてくれてありがとう。ずこうのとき『きみはてんさいだ。』ていってくれてありがとうございます。

この1年かん、ほんとうにありがとうございました。1ねんかんおつかれさま。また1ねんかんがんばってください。

りょうくんの手紙から「4 月、自分はつまづいた。だけど助けてくれたから、乗り越えられた。自信がついたよ。ありがとう」の思い、そして、私への温かな気遣いが伝わってきた。

りょうくんに早速返信した。

「りょうくんは、おとながあまりかんがえたり、したりしないことを、いったり、したりする。わたしは、それだから、いっぱいあたまをつかう。すると、アイデアがうかぶ。だから、きみは、てんさいです。1年かんおつかれさまといってくれてありがとう。たのしい一年かんでしたよ。りょうくんからゆうきをもらったので、またがんばります。

かわさきけいこ」

子どもたちとの日々は、このような身近な感動にあふれている。言葉で傷つき、自信をなくしていく子どものニュースに心が痛む。子どもはいつでもできるようになりたい、ほめられたいと思って毎日を生きている。



＜りょうくんが満足した作品＞

左上の太陽は最初に描いた太陽。右上のいくつかの○は、文字を書いてしまったところ。濃い色で○を重ねて、文字が消えている。

[目次へ](#)

論考

子ども像の考現学 (1)

子どもの遊び

深谷 昌志

(東京成徳大学 名誉教授)

1 「遊ぶ」のが子どもらしさ

「遊びをせむとや生れけむ、戯れせむとや生まれけむ、遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動がるれ」『梁塵秘抄』は治承年間（1180 年前後）に作られた歌謡集と聞く。

「我と来て 遊べや 親のない雀」は、3 歳で生母と死別し、継母と不和だった一茶（1763－1827）が、子ども時代の淋しい心情を吐露したものと評価されている。遊びで心の空白を埋めようとする一茶の気持が心を打つ。

大田才次郎編の『日本児童遊戯集』（東洋文庫 122、平凡社、昭和 43 年）には、明治 34 年頃の各地の子どもの遊びが収集されている。東京の項を見ると、183 種類の遊びが並んでいる。筆者は昭和 10 年代半ばに、東京の下町で子ども時代を過ごしたが、「石蹴り」、「お山の大將」、「鬼ごっこ」、「かいぼり」、「手拭い引き」など、同書に収録されている 6 割以上の遊びに思い出がある。明治から大正、そして昭和へと、年上の子から年下の子へ、遊びが受け継がれていったのであろう。

多くの「自伝」を読んでいると、時代や地域を越えて、ほぼ全員が子ども時代の思い出として遊びに多くのスペースを割いている。例えば、社会主義者として知られる片山潜（安政 6（1859）年生まれ）は岡山の久米郡で子ども時代を過ごしている。そして、子ども時代の思い出として、木登りやかくれんぼ、ドジョウ掘りなどの紹介に多くのページを割いている。もっとも、田植えや田の草取り、柴刈りなど、多くの村人の中に加わった農作業の思い出も遊びに含めている。子どもにとっては、田植えも楽しいハレの日だったのだろう。

片山潜「自伝」『日本人の自伝』8 平凡社 1981

『鳴門秘帖』や『宮本武蔵』で知られる吉川

英治（明治 25 年、横浜育ち）は、家の斜陽化や継母との不和など、苦勞の多い子ども時代を過ごしているが、自伝の中で、「童戯変遷」の章を設けて、遊びを回顧している。そして、メンコ、根っ木、ブランコ、縄跳び、ラムネの玉遊び、コマ、凧、石蹴り、竹馬、金輪廻しなどの遊びをあげている。根っ木や金輪廻しのように説明の必要な遊びもあるが、多くは現在でも通用する遊びである。そうした中で、「メンコや根っ木みたいな博打的遊戯は、決していいとはしていなかった。ぼくなども隠れてやっていた」（p 35）という。なお、「根っ木」は尖った棒で「釘刺し」と同じように地面を刺す遊びである。

吉川英治『忘れ残りの記』角川文庫 1962（昭和 37）

2 遊びが変質した

多才な芸能活動を展開した小沢昭一（昭和 4 年）は蒲田で子ども時代を過ごしたが、自伝の中で、「今すぐ思い出すものだけでも」と断りながら、おにごっこ、かくれんぼ、水雷艦長、西洋陣とり、押しくらまんじゅう、チャンバラごっこ、ドッジボール、探偵ごっこ、石けりなど、74 の遊びをあげ、「まだまだ際限なくあるだろう。それに、駄菓子屋へ行く、紙芝居屋が来る。物売りが来る。（中略）あの頃の子どもは実によく外で遊んでいたものだ」（p 55）と回想している。それだけでは不足なのか、章を改めた「相撲メン 鯨の里編」で、「明けても暮れても、朝、昼、晩。夜は枕もとに積み重ね、何枚か手にしっかり握って寝たものだっけ」（p 132）と、相撲メンへの傾倒ぶりを記述している。

小沢昭一『わた史発掘』文芸春秋社 1978（昭和 53）

小沢の子ども時代は昭和 10 年代であろうが、大人世代なら、そこに挙げられている遊びの大

半に共感を持てるのではなかろうか。つまり、明治、大正、昭和と、時代を超えて遊びが継承され、遊びには、共通のイメージが持たれているのであろう。かくれんぼや鬼ごっこが、その典型であろうが、遊びには、①屋外で、②何人かの子と、③体を動かすなどの特性が見られる。

それに対して、現在の子どもはどんな遊びをしているか。かくれんぼや鬼ごっこに興じる子どもの姿を見かけなくなって、すでに久しい。そして、遊びかどうかはともあれ、子どもはケータイやスマホ、ゲームなどに接して時間を費やしている。もちろん、子どもの回りにはテレビやマンガ、サウンドもある。

「テレビを見る」を、遊びに含めるかは意見の分かれるところであろう。「かくれんぼ」などの「群れ遊び」を子どもの遊びととらえるなら、子どもがテレビに見入り、かくれんぼなどをしなくなったから、遊びが「消滅」したことになる。しかし、鬼ごっこもテレビも自由な時間の使い方と考えるなら、子どもの遊びが「群れ型」から「孤立型」へ変質したことになる。これは「遊び」のとらえ方の問題となる。そして、スマホの時代を迎えて、遊びの孤立化がさらに進んだのが、現在の状況であろう。

3 「豊かな遊び」から「貧しい遊び」へ

「遊び」には、多くの優れた先行研究があるが、ヨハン・ホイジンガは、ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）の特性を「自発性」としているし、ロジェ・カイヨアも、遊びの特性として、「非生産性」や「不確定さ」と並んで、「強制されない自由さ」をあげている。

成人の場合、余暇は労働と対比されて捉えることが通例だが、たしかに「労働」は、収入を得るための拘束性を強いる活動なのに対して、「余暇」は拘束から解放された時間を自主的に自由に活用することを特性とする。そして子どもの場合、大人の「労働」にあたるものは「勉強」であろう。子どもは勉強をするために学校へ通うことを義務付けられ、学校では教師の指示に従って行動することが求められる。それに対して遊びは、子ども自身の自主的な営みという点で独自性を持つ。子どもが大人になる過程で、「指示に従う側面」と「自分で行動を起こす側面」との両面に身を置くことが重要ではなかろうか。

それだけに、現在の子どもの遊びが孤立型へ

推移し、子どもの自主性を育てる場が少ないのが気になる。そこでもう一度、小沢昭一の描く遊びの世界に戻ってみよう。

「鬼ごっこ」でも「水雷艦長」でもいいが、遊びが、結果として子どもの心身双方の成長を促しているのに気づく。そうした遊びの効用を拾い上げると、①外で体を動かすから、健康を増進する。②遊びの中で、創意工夫を凝らすので、意欲が育つ。③友だちと遊ぶことを通して、人間関係の持ち方を覚える。それと同時に、④子どもだけで集団を作るので、集団での行動様式が身につく。あるいは、⑤遊びを通して気晴らしができる、などとなる。そうした意味で「群れ遊び」は、子どもの心身ともの成長を促す「豊かな遊び」と言えよう。

それに対して、テレビやスマホは、①体を動かさないし、②友も増えないし、まして、③集団的な行動も身につかないし、④創意工夫も少ない。したがって、子どもの成長に即さない「貧しい」遊びであろう。

4 かつてのギャング集団の中での子どもの暮らし

『スタンド・バイ・ミー（1986年）』（映画）は、少年期の心情を描いた名画の一つだが、冒頭で、12歳の4人の男の子が、木の上に秘密の隠れ家を作る場面が登場する。隠れ家では、タバコを吸ったり、秘密の約束をしたりして、仲間意識を強め、その後、死体探しに森に立ち入ることになる。

『スタンド・バイ・ミー』が心を打つのは、多くの人が、自分の子ども時代を連想するからであろう。映画ほど劇的ではなくとも、ある年齢から上の世代は「秘密の隠れ家」の思い出を持つのではないだろうか。そうした隠れ家には、①同性の異年齢の子が集まり、②固定したメンバーが、③集団内に序列を作り、④集団としての決まりがあって、⑤縄張りを作って、⑤遊びの形で、時には逸脱行為を行う、などの特性を持っている。

子どものそうした姿が、アル・カポネに象徴されるシカゴのギャングを連想させることから、1920年代に、シカゴ大学の研究者が、群れを「ギャング集団」、群れを作りやすい年齢を「ギャング・エイジ」と名付けた。なお語源的には、「gang」いわゆるギャングは、「統率者の下にいる労働者や囚人の群れ」的な意味を持つ

ことも付記しておく。

筆者は東京の上野駅の近くで少年時代を過ごしたが、隣家の物置が隠れ家で、8人で群れを作っていた。メンコを工夫したワッペンがメンバーの印で、隠れ家に入るときは、そのワッペンを示して、「エイ」というのが決まりだった。そして、下谷小学校までの500メートルほどの間に、8つの群れがあり、相互に親密や敵対の関係があった。小学低学年の「みそっかす」の子を保護するのも、メンバーの務めだった。みそっかすの子が他の群れからいじめられた時、放置すると意気地なしといわれるから、攻撃に向かう。当然、向こうも反撃してくるので、互いに緊張した毎日が続く。学校の登下校も、敵対する群れのいる地域を避けて、友好関係にある群れを選びながら通うのが日常であった。

そういえば、近くの不忍池から禁断の大きな鯉を取り、鯉を抱えて、広小路を走り抜けるのが、他のギャングに対するデモンストレーションの行為だった。それ以上に評価の高かったのは、校区の端に子分を待たせて、単身で、隣の金曾木小学校の校門の前に行って、大声で、「金曾木学校、ぼろ学校、よくよく見ても、ぼろ学校」と2回叫ぶ行為だった。その頃は校区内でも緊張を伴うのに、他校の校区は全く未知の敵地で、今の子がアメリカへ行く以上に、他の学校の校門に行くのは勇気のいる行為だった。そして、6年生になっても、「ぼろ学校」と叫べない子は「意気地なし」といわれ、仲間から蔑まれるのが常だった。

5 「俗の文化」の中に身を置く

筆者は上野の老舗の下駄屋の姉2人を持つ一人息子の跡取りで、隣家の同じ年の義ちゃんは、小さな魚屋の7人きょうだいの5番目だった。そんな2人のウマが合うはずもなく、わがままで身勝手な筆者と、抜け目なく動く義ちゃんとはいさかいの日々で、それを乾物屋の武ちゃんが6年生として裁いてくれた。武ちゃんが高等科へ進んだ翌年は、足袋屋の憲ちゃんが大将になった。

下町の商店街なので、どの子にも「魚屋のケンちゃん」のように（お店の）呼び名がついていたが、低学年はミソッカスとして群れの回りを動き回り、中学年の下っ端を経て6年生になると、誰かが、がき大将となる決まりだった。そうした形で、どの子もイエの子からマチの子

へと育っていった思いがする。とくに下町の親は家業で忙しく、子どもの群れに関わらなかったから、子どもたちは、群れ内外のトラブルを自分たちで解決する必要があった。中でも、友好関係にある群れが、他の群れからの襲撃を受けた時、どう援軍を出すかなどは神経を使う行為だった。

こうした子どもの群れは、昭和40年代に入ってから、家庭にテレビが普及する頃から姿を消すようになる。紙芝居の「黄金バット」よりテレビの「鉄腕アトム」の方が何倍も面白いので、子どもは家にこもる。その結果、紙芝居屋が廃業に追い込まれ、多くの駄菓子屋も店を閉めて、町から子どもの声が聞こえなくなった。今から半世紀も前のことである。したがって、ギャング・エイジの最後の体験者は、今は還暦世代であろうか。

もちろんその後でも、隠れ家を家の中に移したり、あるいは、男女混合の群れも出てくる。そして中学生の子もメンバーに残り、毎日ではなく土曜日だけ集まるなど、群れの形を変えながら、昭和の終わり頃までギャング集団の姿があったように思う。したがって、40代位の方は、多少変形した形になるが、ギャング集団の最後の体験者なのかもしれない。

昔から、学校での優等生は、教師の指示に忠実に従う「指示待ちタイプ」で、社会に出てから挫折しやすいと言われたりする。しかし遊びのリーダーは、悪戯っ子を率いる行動派だけに、がき大将は社会で活躍するとも言われてきた。

たしかに「学校」は望ましいことを伝える「聖の文化」の上に成り立っている。それに対して、群れ遊びは「ギャング集団」の名の通りに逸脱性を含んだ「俗の文化」の色彩を伴う。どう考えてもメンコやベーゴマは賭け事だし、かいぼり（流れを止めて、水を掻き出して魚をとる）は田畑を荒らす遊びだった。駄菓子屋の万引きも常態化していたが、1回目は大目に見ても、何人かで繰り返すと、店のお婆ちゃんがすごい剣幕で叱る。子どもと駄菓子屋のお婆ちゃんとの間に、してはいけないことへの暗黙の了解があった気がする。かつての時代、子どもは、地域という実社会の中で、俗的な行為を繰り返しながら生き方を身につけていったのであろう。

6 子どもの「フリー・デイ」の勧め

昨今、けん玉やベーゴマの復活を試みる動き

を見聞する。その志は高く評価したいが、電子メディアの時代に、いまさらメンコやベーゴマでもない気がする。それに、鬼ごっこやかくれんぼの場も無いかもしれない。したがって、かつての遊びの再生は、郷愁の世界の再現にとどまり、現実的な意味を持たないように思われる。

その反面、いま、子どもが自分たちだけで過ごせる場や時間を持たないのが気がかりである。子どもは、家庭では親、学校では担任の目に守られている。塾や稽古ごとにも指導者（先生）がいる。子どもは、24時間、大人の目の届く環境の中で育っている。いわば無菌状態の実験室の中で培養されている状態なので、細菌への抵抗力に乏しく、生命力も低下していく。

しかし、子どもが成長するためには、大人の指示を待たずに、自分の判断で、そして可能なら、仲間と共に行動する体験を持つ必要があるのではなかろうか。

野鳥を保護するためには、サンクチュアリ（聖域）が必要だといわれる。外から鳥を観察し、環境に問題がなければそのままにするが、凶作で穀物などが不足している時は、家の軒先にくるみや脂身を置く。そして、サンクチュアリに足を入れないようにする反面、水回りや下

草の整理をして、環境の保全に努めることが大事にされる。

それと同じように、学校や家庭では、時として、子どもの行動に介入しないで、子どもの「サンクチュアリ（聖域）」を設定してはどうだろう。

具体的には、PTAが話し合って、週に1日でも「フリー・デイ」を作ってはどうか。その日をノー・ジューク・デイとし、学校は宿題を減らす。家庭も、夕方まで、子どもの外遊びを促す。また、地域のボランティアを募り、遊ぶ子どもを見守る仕組みを作る。校庭や公園、そして、企業や施設に子どもが遊べるフリー・スペースを設ける。老人ホームの開放もいいと思う。そうした試みを積み重ねれば、子どもは活動を通して、自主性を身につけるのではないか。子どものための「サンクチュアリ」（聖域）の設定である。実施にあたっては、費用はかからないから、学校と地域、家庭が一体となって、放課後児童クラブや放課後子ども教室などが推進母体になれば、実現の可能も高まるであろう。

健やかな子どもの成長を願って、フリー・デイの推進を強く求めたいと思っている。

[目次へ](#)

子ども食堂を考える

— コミュニティづくりの柱として —

瀧口 優

(白梅学園短期大学 名誉教授)

1 「子ども食堂」とは何か

(1) こども食堂という名称について

「こども食堂」という場合は焦点が子どもにあたりがちであるが、近藤博子・湯浅誠によれば「こども食堂は、こどもの食堂ではない」(近藤博子・湯浅誠 2016) し、「こども食堂とは、こどもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」(同上) である。「一人暮らし高齢者の食事会に子どもが来られるようになれば、それも『こども食堂』」(同上) と言われているように子どもだけが対象ではないという。子どもを窓口にして大人や高齢者が参加できるものという考え方である。

(2) 論文や書籍等

一般的にこども食堂と言ってもひらがなで「こども食堂」という場合と「子ども食堂」として一部漢字にする場合と、全てを漢字にして「子供食堂」とする違いがある。論文や書籍の検索を行うと以下の通りである。CiNii (論文検索) では 「こども食堂」 132 (論文 120、本 6、博論 1、プロジェクト 5)、「子ども食堂」 327 (論文 293、本 13、プロジェクト 21) となり、国立国会図書館では「こども食堂」 198 (2016 年練馬区初出)、「子ども食堂」 477 (2015 年豊島区初出)、「子供食堂」 6 となる (2022 年 5 月 3 日現在)。圧倒的に「子ども食堂」となっている。

(3) こども食堂のはじまり

こども食堂がいつごろから始まり、どのように発展したのかについて上記の近藤・湯浅の傾聴の中では以下のように紹介されている。

- ・2011 年：「気まぐれ八百屋だんだん」の一角に「こども食堂」が設置された

店主近藤博子 (歯科衛生士+居場所づくり)

- ・2012 年：東京都豊島区要町に「要町あさやけ子ども食堂」WAKUWAKU
- ・2015 年：「こども食堂ネットワーク」と「こども食堂サミット」WAKUWAKU
- ・2018 年：「こども食堂安心・安全向上委員会」2236 軒
- ・2019 年：「ファミマこども食堂」
- ・2019 年：「全国こども食堂支援センター・むすびえ (湯浅誠)」調査、3718 か所延べ 160 万人

(4) なぜこども食堂か

労働環境の悪化、非正規労働者の増加など労働者の視点からのアプローチは数多く行われてきたが、日本の貧困についてそれを正面から取り上げるということはあまりできていなかったように思える。しかし子どもの貧困率が衝撃的 (2012 年 16.3%) に紹介され、それをどうしたらよいのかという思いと東日本大震災を背景に「こども食堂」に注目が集まったように思われる。

前述の近藤・湯浅によれば、「『こども』『食』という“必殺アイテム”を並べたこの簡潔なネーミングが、誰のために何をするかをこれ以上ない形で明確に表わす。こども食堂の広がり、このネーミングを抜きには語れない。」(近藤博子・湯浅誠 2016) ということになる。それを整理すると以下ようになる。

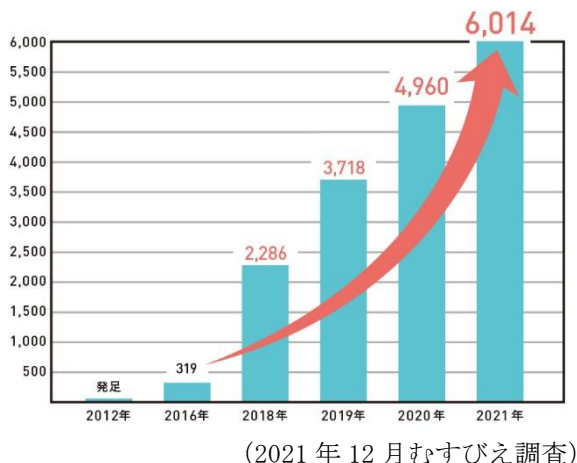
- ① 誰もが心を寄せる「こども」への視点が入っている。
- ② 「食べる」という具体的行動への視点が入っている。
- ③ 食づくりというわかりやすい支援への視点が入っている。

子ども食堂を考える
— コミュニティづくりの柱として —

- ④ 食べながら、作りながら行う交流への視点が入っている。
- ⑤ 何か役に立ちたいという慈善への視点が入っている。

2 「こども食堂」の現状

(1) 全国のこども食堂の箇所数推移



こども食堂の発足が2012年で、最初の4年間はゆっくりとしたペースであったが、この5年間は一気に拡大し、2021年12月末現在で6014か所に達している。全国の自治体がおおよそ1800と言われている中で考えると、各市町村に平均3か所以上存在していることになる。歩いていくには広すぎるが、手の届く距離に「こども食堂」が存在していることになる。小学校の数が20000を少し越えるところから考えると、近々各小学校区に1つの「こども食堂」がうまれることになる。

(2) 主催者・団体の状況

ではこうした「こども食堂」を運営している団体はどんなところだろうか。これも「むすびえ」の調査から引用したものであるが、①任意団体（市民活動）42.9%、②NPO法人16.2%、③個人13.0%、④社会福祉法人5.9%、⑤任意団体（自治会・町内会等）4.9%、⑥社団法人4.8%、⑦その他（宗教法人、企業、社協等）となっている。公的なものは少なく、圧倒的に民間の取り組みに依拠していることがわかる。

(3) 開催場所・費用等の状況

また開催場所については、①公的施設（学校、公民館、児童館、神社、お寺、教会等）、②準公的施設（社会福祉協議会、介護施設交流スペース、保育園、大学食堂等）、③私的施設（個人宅、空き家、事務所、空き店舗、飲食店等）となっており、公的な場所も活用されていることがわかる。なお費用については基本的に子どもは無料か半額で、大人は有料となり、材料提供などを得て運営を維持している。

3 「子ども食堂」と地域

こども食堂が実施している地域づくり活動は以下のような数字になっている。最も大きな理由が「世代間交流」であり（66.8%）、「食品ロス削減する取り組み」（43.7%）がその次に来ている。その他、「大学生等の地域の若者の参加を促す取り組み」（32.5%）、「地域の会合・イベントへの参加」（26.4%）「自治体等の協議会への参加」（22.2%）及び「従来の地域団体活動の活性化」（22.1%）となっている。高齢化が急速に進む中で世代間の交流が重要な意味をもっているというのがこども食堂実施者の願いであるということがわかる。

4 「子ども食堂」のこれから

「昔には戻れない現在という地点において、未来へ向けて新たな“場”を創り出していこうという試み」（近藤・湯浅 2016）に象徴されるように、「こども食堂」が既存の組織やつながりを越えてあらたな「居場所」づくりになっていくのではないかと。具体的な「こども食堂」の成果としては以下の通りである。

- ① 「子ども食堂」を通じて子どもの貧困問題に正面から取り組んでいる
- ② 「子ども食堂」を通じて地域づくりがすすむ可能性ができてきている
- ③ 「子ども食堂」を通じて誰でも支援に参加できる形が見えてきた
- ④ 「子ども食堂」を通じて行政を動かす可能性ができてきている

なお詳細は省略するが、課題としては以下の点が考えられる。

- ① 材料費も含めた運営資金をどうするか
- ② 食事を調理・提供する施設の不足

- ③ ボランティアの確保と割り振り
- ④ 栄養面、衛生面の管理と調整
- ⑤ 支援対象者

【参考文献等】

- 子どもの貧困対策の推進に関する法律 2013
- 近藤博子・湯浅誠 2016
<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20160724-00060184>
- 堀内雄斗 2019 「子どもの貧困」の把握と対策 国立国会図書館『調査と情報』
- 南出吉祥 2017 子ども食堂で問い直される「子どもの貧困」 『教育』2017年10月号
- むすびえ 2022 第1回全国子ども食堂実態調査
<https://musubie.org/news/4881>
- 森永徳一 2022 「子ども食堂の現状を考える ―子どもの貧困問題の側面から」 日本子ども支援学会ニューズレター『風の便り』臨時増刊 2022年6月

[目次へ](#)

小林一茶「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」 を読む

市原 潤
(元長野県立高校長)

1 国定教科書の一茶

この句は、第4期の国定教科書『小学校国語読本巻9』（「小学国語読本」巻1～巻12 使用期間：1933（昭和8）～1940（昭和15）年）に他の4句とともに掲載された。

雀の子そこのけそこのけお馬が通る
さあござれこゝまでござれ雀の子
赤馬の鼻で吹きけり雀の子
やせ蛙まけるな一茶これにあり
やれ打つなはへが手をする足をする

掲載された句について国定教科書の編纂趣意書は次のように書いている。

一茶の作を最初に選んだのは、専ら純真な児童の心理に適合するものがあるからである。…小林一茶の作品中から、最も有名で、児童の興味に適することを標準として選んだ。¹

初めて俳句に接する子どもにも分かりやすく親しみやすい情景が描かれる句として選者はこれを選んだ、としている。

同時に発行された指導書²では、この章の冒頭で指導の要旨として「一茶の俳句により、その情趣および童心を味はせ、文学的趣味を養ふことが主眼である」とし、さらに次の四点の注意³を掲げている。

- 1 わが国文学の一形式として取り扱い、その精神を味はせることを眼目とする
- 2 一茶の童心を句によって味はせることを忘れてはならぬ。

3 俳句鑑賞の眼を開くやうに取扱ふことが大事である。

4 一茶の句を始め、児童に解し易きものを補充教材として取扱ふやうにしたい。

と、この記述に加えて、さらに次節の「文章研究」⁴でも、俳句理解の難しさについて、俳句は、「短詩形に複雑微妙な詩趣を盛ったものであるから、児童にはかなり難解なものであるが、本課に掲げた一茶の句は何れも童心をうたったもので、児童には最も親しみ易いものである」ので、授業のなかでも、児童たちに「明らかにすること」として、作者の一茶について、「悲惨な家庭に育ち苦労した」が、「童心を失わなかった（俳句の）大家」である、ことなどを強調している。

さらに、句についての具体的な指導では、授業では子どもたちにこれらの句を通読させ、その意を発表させたうえで、授業者が解説できるよう各句について次の説明をあげている。

一句目は、一茶と雀とが一つになって遊んでゐる心持が見える。雀と遊ぶ、それは一茶ならではの出来ない所だ。雀の子が道に餌を拾ってゐる。其処へお馬が鈴音を鳴らしてやって来たのだ。馬に踏まれてはと、手でかばふやうにして其処のけ、其処のけ、お馬が通るから危ないよ、早よのけと手をとるやうにして注意を與へてゐる慈愛にみちた句である。⁵

二句目以降については「親愛の情」、「写生の句」、「溢れるやうな同情」、「命乞をしてゐる…一匹の蠅、さうしたものにも、働きかけてゐる…一茶の愛」と読解の要点に言及している。

さらに「補充句」として、次の五句をかかげ、

¹ 中村喜久二『復刻国定教科書編纂趣意書 第七巻』国書刊行会 2008.9.25 pp.8-9 p14

² 『小学校国語読本指導書巻九』昭和12年

³ 同上 145p

⁴ 同上 149p

⁵ 同上 150p

それらを「書写させ、句意を深める。五七五音の句形を指導する」よう記している⁶。

大猫の尻尾でなぶる小蝶かな 七番日記 文政1
 いうぜんとして山を見る蛙かな // 文化10
 大根引大根で道を教へけり // 文化11
 わんぱくやしばられながらよぶ螢 // 文化13
 小男鹿の喰ひこぼしけり萩の花

八番日記 文政2

2 小林一茶の生涯と『俳人一茶』の出版

小学校教科書に掲載されることによって、一茶とその句は、多くの人々の知るところとなったが、それ以前には句も人も必ずしも一般によく知られるところではなかった。

あらためて、小林一茶の句と人生の概略を示せば次のようになる。

小林一茶(弥太郎)は、宝暦13(1763)年、信濃国柏原に生まれた。3歳のとき母くにを失い、祖母かなに育てられた。父弥五兵衛は弥太郎8歳の時再婚し、義弟仙六が生まれたが、弥太郎と継母はつとの関係は悪く、祖母が亡くなった翌年の安永5(1776)年、弥太郎は江戸に出された。15歳だった。弥太郎が、江戸のどこでどのように暮らしたのか。全く分っていない。

しかし、やがて俳諧で身を立てられるようになった弥太郎は、寛政3年4月、29歳の時、出郷後初めて柏原に帰省した。父に西国紀行の計画を話し、父からは本願寺の代参を頼まれ、いったん江戸に戻ったが、翌年3月、西国行脚の途へと江戸を出立した。九州・四国にも足を延ばした長い旅のあと、寛政10(1798)年、36歳の秋、一茶はようやく江戸に戻り浅草に居を定めた。

『寛政三年紀行』『寛政句帖』『寛政六年句日記』『旅拾遺』『さらば笠』は、この間の一茶⁷の句と文章である。江戸帰着後は、俳諧師として江戸市中から上総、下総を中心に活動した。各地の俳諧宗匠や連衆と交わり、また自身の門下をもち、彼らとともに連句をつくり句を詠んだ。

句集なども出版され、俳諧の発句類題集⁸にも句が掲載され、生前からその死後も、俳諧の世界では知られる存在となった。

しかし、一茶の句が広く一般に知られるようになるのは、明治30年の『俳人一茶』によってであった。この書の版元は「東京三松堂」で、選句や類題(季語)の整理編集にあたったのは、信州戸隠村出身の当時は国学院の学生の宮沢岩太郎と宮沢義喜の二人だった⁹。正岡子規が校閲者として、巻末に「一茶の俳句を評す」の一文を寄せたが、病を押しながらの仕事で、のちに二人の編集を批判することとなった。¹⁰、しかし、この書によって、一茶は広く世に知られることとなった。編者は冒頭の「例言」で書いている。

一 俳人多かれど、風刺家に乏しく、前後只茶翁一人ぞある。其用語平易にして、其意は世風の矯正にあり。茶翁陋巷に住みて、楽を青雲の外にもとめ、永き憂世を俳諧の短きにまかせ、平易の語句中に、無量の真理を含ませたれば、誰にても解し得ざるなく、人世の秘を摘む処、一読直に同情を表すべし。

一 豪放不羈、百万石も笹の露と、世を觀じたる茶翁、…(以下略)

子規は、書の最後に「一茶の俳句を評す」の一文を寄せて次のように書いている。¹¹

…俳句の実質に於ける一茶の特色は、主として滑稽、諷刺、慈愛の三点にあり。中にも滑稽は一茶の独擅に属し、しかも其輕妙なること俳句界数百年間、僅に似たる者をだに見ず。例句

春雨や食はれ残りの鴨がなく

下や一番の顔して衣更

大根引き大根で道を教へけり

寒念仏さては貴殿でありしよな

滑稽の方便として、一茶は多く擬人法を用いたり。集中擬人法の句の多き、真に驚くべ

は明治以降のものである。

⁹ 編者二人の経歴や、刊行の経緯については、この書の復刻版(1999年、信濃毎日新聞社)に付された、一茶研究者の矢羽勝幸氏の文章に詳細な記述がある。

¹⁰ 子規全集4巻「墨のあまり」

¹¹ 『俳人一茶』p180-186

⁶ 指導書には句集や年代は記載されていないが、ここでは参考のために付記した。

⁷ 30歳のとき、西国行脚をまえにして、「春立や弥太郎改め一茶坊」の句を詠んだ。

⁸ 『俳諧近世発句類題集』が刊行され、一茶の句も掲載されている。正岡子規は類題研究の膨大な資料を残している。一般に季語歳時記の名称

し。例句

庵の雪下手な消えやうしたりけり
名月のご覧の通り屑家かな
……

此外滑稽ならぬ意匠の句にも尚多少の滑稽を帯びたるは、其滑稽に深きがためなるべし。例句

陽炎や手に下駄はいて善光寺
……

一文に一つ鉦打つ寒さかな

一茶は不平多かりし人なり。苛政を惡み、酷吏を惡み無慈悲なる人を惡み、俗氣多き人を惡む。俗世間の事見るもの聞くもの、悉く不平の種ならぬはなく、従って其句また人を刺り世を嘲りし者あり。

……

一茶は熱血の人なり。一方において人を罵ると共に、又一方に於て極めて人を愛す。…其慈愛心は動物にも及べり。彼は雀の子の覺束なげに飛ぶを見ても、蛍の人に取られんとするを見ても、猶心を動かせり。俳句は之を証す。

雀子や川の中にて親を呼ぶ
やれ打つな蠅が手をする足をする
(以下略)

3 諸家の評

いうまでもなく、五七五の音の連なりを言語表現の一つとして確立したのは、近世初期の芭蕉であったが、芭蕉の後の蕪村、その後の一茶も、独自の句風を確立し、後世に大きな影響を与えた。

「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」は、一茶を代表する句の一つである。しかし、その言葉の理解、解釈には評者による大きな差がある。小学校教科書に掲載した編者の評価も、この句についての理解と評価の一つである。

代表的な評者と句の理解について概観しておきたい。

川島つゆ

子供や小動物対して深い同情を見せているのが一茶の作品の特色であることは、既に知らるる如くである。子供や小動物に対する

時、初めて警戒を解いて、安心して対象に解け込んで居るやうに見える。従ってそれ等の句の中に秀逸が多い。この句は、畦道などに雀の子が三々五々下りたって居る中を、馬曳いて行く人の親しげな気持ち。或いは、傍観して居る人の稍々はらはらした気持ちが感ぜられる。ひとりで唇の上に轉び出たかと思はれるほど円熟した調子のよい句である。雀の子に対してお馬という言葉もふさわしく可愛らしい。¹²

栗山理一

「雀の子」の句解についてはこれまでも諸説に分かれている。畦道などに遊んでいる雀の前を通る曳馬と見る説、「御馬」とあるので大名行列の馬とする説、子供の竹馬や玩具の馬とする説などである。いずれに従えばよいのか、はっきりした極め手もないが、全体の句調から感じとられるものは、ひどく弾んだ掛声のようなもので、普通の曳馬や、静かな行列の馬というよりは、やはり路上を闊歩する子供の玩具の馬と解するのが穏当であろう。「お馬が通る、先のけ先のけ」と囁きながら子供が玩具の馬にまたがって走り回る風習はいくらか地方にあった。大名行列の御馬にせよ、畦道などの曳馬にせよ、句勢がそぐわないように思われる。…雀の子と玩具の馬との取合せには童詩のような雰囲気がある。¹³

高浜虚子

「下におろ」とか「のいたのいた」とか人払いをして大名の馬が通る。それを見る度に一茶の眼には憤慨の涙がにじみ出たものであろう。この句は雀の子が、まだ十分に羽づくろいも出来ずに道の上に下りておる。そこへ大名の行列が来た、「雀子よ其処をのいたのいた、そうしないと馬にふまれて死ぬるぞ」というのである。雀子に托して百姓などのみじめさを言ったものである。¹⁴

黄色瑞華

「雀の子」と「御馬」は、力という観点をもつての対比である。その力とは、いうまでもなく権力である。すなわち、「雀の子」は、「雀の子」にも比すべき弱者・被支配者の力、

¹² 川島つゆ『一茶俳句新釈』大正 15 年 江玉堂書店 37-38p

¹³ 栗山理一『小林一茶』昭和 45 年 筑摩書房

日本詩人選 19 92p

¹⁴ 高浜虚子『俳句はかく解しかく味わう』昭和 48 年 新樹社 108 p

その象徴である。「御馬」は、「馬」にも比すべき強大な支配者の力、その象徴である。街道の端に土下座して、武家の行列を見送る農民の姿は、まさに「雀の子」にも比すべく、哀れにも小さいのである。「花見んと致せば下に下に哉」(八番日記)、…「づぶ濡れの大名を見る炬燵かな」(同)などと、併せて解釈すべきものである。…一茶は現実を告発しているのである。

柏原帰住後の一茶は、都会の享樂的な生活をほとんど句にしていなかった。彼が深く心を寄せたのは、庶民の哀歎か時代の底辺にうごめくようにして生きる弱者の生きざまや、その心情についてであった。その一方には、「馬迄もはたご泊や春の雨」「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」に見られるような、体制や社会に対する批判の姿勢があったのである。

15

大谷弘至

大名行列だろうか。あるいは伝令の馬か。呑気に道の真ん中で遊んでいる子雀に注意を促しているところである。蹴飛ばされたり、踏まれたりしないように気遣っているのだ。

この馬が何の馬であるかということについては諸説ある。例えば、子どもが竹馬などに乗って遊んでいる様子とする説とか、駄馬が通りかかったとする説である。しかし、何と言っても一茶という人は反体制の人である。〈づぶ濡れの大名を見る巨燵かな〉と詠む人である。

権力を振りかざして威圧的にふるまう人間が、無垢な小雀を蹴散らして行こうとする様子と緊迫感とあわれさこそが、一句の核心である、日頃から権力に対する反発心を持っていた一茶の心の反映であり、一茶の意図はそこにあったはずである。そのほかの解釈では、そういった意図がなくなり、一句がぼんやりしてしまう。やはり大名行列などの武士階級を乗せた馬と読むべきであろう。¹⁵

4 一茶の童心と金子兜太一

この句では、一茶は「お馬」ではなく「御馬」

と表記しているのも、これは武士の馬である。御馬の句は少なく、殆どは「馬」の句である。しかし、彼は武士やその馬に常に反感を持ち敵愾心をいだいているわけではない。一茶は目に入り、心にひびくものごとをすべて俳句に詠んだ。

しかし、後世は、一茶の感じ考えた以上に、というよりも、一茶が感じも考えもしなかったほどに「政治」的で「文学」的なようである。彼は生涯に2万を超える句を詠んだ。現在、そのすべてをweb上¹⁷で検索することができる。地元のボランティアや中学生の協力によって作成されたものだが、『一茶全集』(第1-8巻 昭和53-54年 信濃毎日新聞社)、その他書籍と併用すれば、便利なものである。

一茶は生涯に馬の句を300句ほど詠んでいる。登場する殆どの馬は「馬」であり、大名の馬、武士の馬、農民の馬と多様だが、武士の「馬」や「御馬」の句は少ない。「御馬」は「雀の子」を除いて7句である¹⁸。句の主人公「御馬」の姿を通して、「御馬」に仕える人の姿がみえる。馬と人は一体の光景であり、その光景を見たままに感じたままに詠むことで一茶は十分だと思っている。句の光景の中にすべてが描かれる。一茶は「御馬」に特別な敵愾心や反感、警戒心があるわけではない。

咲く花に武張り給はぬ御馬哉 花見の記 文化5
涼しさにしやんと髪結御馬哉 八番日記 文政2
御馬の汗さまさする木陰哉 享和句帖 享和3
武士に蠅を追する御馬哉 七番日記 文化13
武士に蠅を追せる御馬哉 文政版
露霜をふひしてなめる御馬哉 八番日記 文政2
御馬の尻流れけり萩の花 享和句帖 享和3
大名のなでやりけり馬の汗 享和句帖 享和3

金子兜太は、次のように書いている。

「北国街道柏原宿は伝馬の馬が多い。道ばたでは、巢立ったばかりの雀の子が、ちょんちょんはねている。それを自分の分身のように、一茶は見ているから、おもわず、そこのけそこのけ、という呼びかけのことばがでてしまうのだ。よく見るのは、蠅に同じ生きものとしての、まるで自分の分身のような、親

¹⁵ 黄色瑞華『諷刺から直写へ』城西大学研究年報. 人文・社会科学編 19 33-42, 1995-03

¹⁶ 大谷弘至『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 小林一茶』平成29年 角川ソフィア文庫

pp. 39-40

¹⁷ 一茶の俳句データベース (一茶俳句全集 V1. 3 0)

¹⁸ 同上

身なものを感じているからである。」¹⁹

また、これも一茶の有名な句、「やれ打つな蠅が手を摺り足をする」について

「これを蠅に対する一茶の慈悲心ととる人が多いのだが、それではあまりに形式的である。私はこう受けとる。一茶は蠅をよく見ていたのだ。」²⁰

後年、彼はまた、次のようにも書いている。

「蠅の格好のおもしろさを捉えている。その捉えかたのやわらかさ、おかしさが、何よりも特色なんで、変に同情的に解すると馬鹿げたことになります。」²¹

人は、普通は、蠅の挙措動作になどに関心をもたない。しかし、一茶は、蠅の手足の細かな動作に見入ってしまう。普通の大人なら興味も関心を持たないことが、いかにも「子どもらしい」、しかし「少し変わった子どものこのような無邪気さ」が「童心」の語を以て評されたのであった。

芭蕉の風雅、蕪村の芸に対して、子規は一茶の「滑稽、諷刺、慈愛」といい、その根底にある一茶への幼き者に対する同情・共感について書いたのだった。「罪惡を以て満たされし世の中に、一茶の同情を惹きしものは、無邪気なる小児のみにやありけん。…小児の事としいへば、憤激し心躍りて、句作にも推敲を費さざりしものと覚ゆ。その慈愛心は動物にも及べり。」²²

しかし、兜太は、一茶の「童心」について、子規以来の通念を逆転させたのだった。いわゆる「童心」を持っているから、そのように句を詠んだのではなく、常識にとらわれず、自分の目や耳や心を十分に働かせて、ものごとを見たり聞いたり感じたりし、そして見たまま感じたままを自らの言葉で表現した。このような感性の柔軟さが一茶の「童心」の実体にほかならないという。

5 一茶の「童心」の本質について

さらに付言すれば、一茶は句の作成について、いわば推敲に推敲を重ねた。ある意味では芭蕉

とは対照的な句作りだった。芭蕉の歌仙に対する態度には非常に厳しいものがあつた。「文台引き下ろせばすなはち反古なり」²³という一期一会の精神こそが人と人の出会いであり「連衆」の句会だと、芭蕉は弟子たちに教えた。芭蕉の「連衆」はその心構えで句会に臨み「歌仙」を巻いた。この芭蕉に対して、一茶は、いわばその対極の精神をもっていたのだった。一茶の句の多さの理由は、何年にもわたって同じテーマを追求し続けたことにあつた。芭蕉に比べると、一茶は、いかにも「軟弱」だが、しかし、考え続ける精神の強さと柔軟性をもっていた。

一茶は「雀の子」と「そこのけ」を使って多くの句を詠んでいる。雀の句は 329 句、「雀の子」「雀子」は 121 句ある²⁴。「雀の子」と「そこのけ」のことばが最もふさわしい場所を一茶は模索したのだった。

「そこのけ」ということばは一茶の時代にも決して日常語ではなかった。大名行列の人払いの時に使われたことばで、大袈裟なものいいだと江戸の庶民は感じたに違いない。意味内容の伝達機能にはそぐわない大仰なものの言いとして、幕府の権威を感じずるよりも、むしろ一種のおかしみを誘う。日常の場面では決して使用しない言い方がむしろ滑稽感を与える。

さらに、雀の子とはいっても、巢立ってしまえば一人前、誰に言われなくても物音や気配には敏感なはずだ。だから、むしろ、実際には不要な物言いをあえて事々しく言い立てたことにおかしみがある。暗黙の裡の互いの了解と行為を、あえて大げさな言葉で言ってみているに過ぎないのかもしれない。

しかし、逆に、人の世と自然が全く交わらないこともかえっておかしみを誘う。加賀の行列を雉が横切ることもあるが、それはそれまでのこと。誰も気にしないが、一茶の句があるので、そういうこともあつたに違いないと後世の読者も気づく。

一茶は「そこのけそこのけ」ということばの落ち着く先を考えて、西国行脚の時代からいくつも句をつくった。「雀の子」は、この後もいくつか詠んだが、「そこのけそこのけ」は文政 2 年

¹⁹ 『小林一茶<漂鳥の俳人>』講談社現代新書 昭和 55 年 182p

²⁰ 同上

²¹ 『小林一茶<句による評伝>』2014 年岩波書店 (1987 年小沢書店刊) 140p

²² 『俳人一茶』183p

²³ 芭蕉の弟子土芳の作 (師の聞き書きである)

『三冊子』の文中の語句。「学ぶ事はつねに有。席に望て文台と我と間に髪を入れず、思ふ事速に云出て、爰に至て迷ふ念なし。文台引おろせば即反古と、きびしく示さるる詞もあり。」

²⁴ 一茶の俳句データベースによる

のこの句が最終稿となった。一茶はこの「そのけそこのけ」が、この語のもっともよい場所だと考えたに違いない。

加賀どのの御先をついと雉哉 七番日記 文政1
雀の子そこのけ――御馬が通る
八番日記 文政2
やよや蝶そこのけ――湯がはねる
七番日記文化13
蝶小てふそこのけ――湯がはねる
浅黄空他文化期後半
雲霧もそこのけ富士を下る声 七番日記 文化11
渋笠を張ぞこのけかたつぶり
文化五六句記文化6
けむからんそこのけ――きり――みす
七番日記 文化10
寝返りをするぞそこのけ蜚 七番日記 文化13
小便に行よそこのけ蟋蟀 海和讃

6 一茶がみていたもの…雪と庶民の暮らし

一茶の故郷信濃の柏原村は北国街道の宿場町だった。加賀百万石の大名行列や、また江戸と信濃の往復の折に出会った行列も旅する身には直接の身近な体験だった。

反古風や隣は前田加賀守 七番日記 文化13
迹供はかすみ引けり加賀の守 八番日記 文政3
迹供はかすみのおくや加賀の守 浅黄空
畠打や寝聳て見る加賀の守 文政句帖 文政7
夕立と加賀もぱつぱと過にけり
七番日記 文化12
とぶ蜚白も加賀みのきたりけり 七番日記 文化7
大名は濡れて通るを巨燵哉 七番日記 文化14
づぶ濡れの大名を見る巨燵哉 八番日記 文政3

1句 反古紙で作った風が空に舞い上がっていく、前田加賀守(の屋敷)の隣だ。殿様の隣の反古紙が面白い。反古紙の風の空にかけあがる勢い。

2・3句 加賀守の長い行列

4句 畑打ち仕事も一休み、麓の街道に加賀守の長い行列がみえる

5句 突然の夕立、加賀守の行列も急いで行ってしまった

6句 道具の白にも加賀印の蓑がかけてある

7・8句 旅程も厳しく難儀な大名行列と安穏な暮らしの炬燵

寒く雪深い一茶の土地では、炬燵は必需品だった。土地は雪に埋もれ田畑の仕事はできない。春からの仕事の準備も必要だが、雪に閉ざされた季節は炬燵の周りにおのずから人は集まり炬燵談義が盛んである。

人誹る会も有也冬籠 文政句帖 文政6
人誹る会が立なり冬籠 文政句帖 文政6

人の姿がみえる春から秋には、誰が何をしているか、田畑の相談も世間話も、会えば立ち話もできるし、互いにわかる。ただ、用もないおしゃべりには気を付けるに越したことはない。自分のいないところでは、誰かが自分の悪口を言っているかもしれない。

雪に閉ざされる冬には、村から人の姿が消えてしまう。何をしているのか、何を考えているのか、わからない。誰が誰に会っているのかもわからない。分からないことが、ときには疑心暗鬼を生む。

何か理由をつけては家を訪ねてみると、先客がいて炬燵談義の最中だったりする。昨年のことや春からの仕事の段取りの情報交換が、あらぬ方へ話が逸れることもある。たいていは他愛のない話だ。

しかし、うわさの種を自分ではまかないことが大事だ。なにごとにも人並みが一番大事だ。目立ってはいけない、村の暮らしは「ちゅうくらい」、誰とも違わないことが最もよいことだ。

目出度さもちう位也おらが春 おらが春 文政2

順礼がやってくるのも人々が家に籠る季節だ。炬燵談義に夢中で、彼らの歌を聴いただけでやり過ごしてしまうこともときにはあるが。

おれが田を誰やらそしる夕涼み

文化三～八写 文化6

寝並びておのが青田をそしる也

八番日記 文政3

唐迄も鵜呑顔して巨燵哉 句稿消息 文化10

日本中鵜呑顔なる巨燵哉 七番日記 文化10

遠山の講釈をする巨燵哉 文政句帖 文政7

思ふ人の側へ割込む巨燵哉 寛政句帖 寛政5

目出度さもちう位也おらが春 おらが春 文政2

順礼に唄損さする巨燵哉 七番日記 文化14

しかし、何ととっても、わが国は平和で安全

だ。徳川の治政は決して悪いものではない。

松陰に寝てくふ六十よ州かな 七番日記 文化9

7 江戸社会のすべてを句に詠んだ一茶

一茶の眼は社会の隅々に及び、彼は見た限りの全てを見たとおりに句に詠んだ。

隠坊がけぶりも御代の青田哉 文化句帖 文化4
棒突や石にかん〜寒の月 七番日記 文化13
木がらしや廿四文の遊女小家 八番日記 文政2
陽炎や手に下駄はいて善光寺 八番日記 文政2
重箱の錢四五文や夕時雨 八番日記 文政2

隠坊は死者の火葬を専らに行った人。江戸時代には死は穢れとみなされ近づくことができなかった。犯罪もまた忌まわしいことで、町や村の警備や取締りを専門とする人びとがいた。

彼らは櫓の六尺棒をもって、石畳など硬い地面を突きながら警備に歩いた。その音が街中に響いた。

善光寺は、全ての人々を受け入れた。足のない人、障害を持つ人が、「下駄をはいた手で歩いて」参詣にやってくる姿もあった。堂庭と呼ばれる山門と仁王門の間の土地は、江戸時代には小屋見世(店)や平見世(露天商)、また香具師の露店や見世物小屋が並ぶ場所だった。参詣に訪れた香具師が、病気のため無一文になったので稼ぎたいと堂庭役人に提出した届もある²⁵。物乞いも排除されなかったのだろう。

一茶の「童心」は、大人には見えないものを見るフィルターではなかった。彼は、先入見や偏見に曇らされず、時代や社会を忖度せず、ものごとの姿をそのままに言葉に写しとった。一茶は自己自身も含めて江戸社会のすべてを句に詠んだのだった。

²⁵ 『善光寺堂庭町の発達』小林 計一郎 社会経済史学 27 (5), 482-500, 1962

日本子ども支援学会ワークショップ一覧

(2021年10月から2022年9月まで)

- 1) 第14回ワークショップ 2021.11.13 pm2~4 リモート
「フランスの子ども事情」上原秀一
「北欧の子どもたちーフランスの子ども事情との比較から」石田祥代
司会：土田雄一
- 2) 第15回ワークショップ 2022.2.12 pm3:30~5:30 リモート
「子どもの育ちを考えるー幼児期を手がかりとして」河村圭
「幼少年期の過酷な育ちの影響ーACEs という新たな視点から」金城悟
司会：明石要一
- 3) 第16回ワークショップ 2022.8.13 pm1~2:30 リモート
「西欧との対比の中で日本の教師像を捉える」深谷昌志
司会：吉田佳代

[目次へ](#)

Book Review

青葉 紘宇 著

「^つ継ぎ^は接ぎ家族」を楽しむ
古川柳の子育てから学ぶ家族の姿

金城 悟
(東京家政大学 教授)

本書は、里親として 25 年間、里子の子育てに取り組んできた著者が、古川柳に描かれた子育ての苦労や喜びの視点を通して現代の里親生活の現実を描いたものである。著者は早稲田大学教育学部卒業後、小田原少年院法務教官、東京都障害関係施設指導員、児童相談所児童福祉司、東京養育家庭の会理事長等の激務をこなしながら平成9年から里親養育に携わっている。著者は日本子ども支援学会の深谷昌志会長と複数の共著や科研費に基づく研究業績のあるわが国の里親研究の第一人者でもある。

私たちの社会には親の病気や貧困、子どもへの虐待等で親と暮らせない子どもたちがいる。そのような保護が必要な状況にいる子どもをわが家に迎えて子育てをする人が里親である。里親は児童福祉法に基づいた里親制度のもとで児童相談所により保護が必要な子どもの子育てを託される。里親に託された子どもたちは里子と呼ばれており、現在、全国で 6,019 人の里子たちが里親の家庭のもとで暮らしている(厚生労働省,2022)。

評者は本書を通してはじめて古川柳に出会った。古川柳は江戸時代に流行した川柳を指すようだ。著者は里親が子育ての重さに落ち込んだとき、古川柳の軽妙な受け返しと街の暮らしの逞しさに接することが気分転換につながり、子育ての気付きに役立ちそうであると述べている。本書で著者は古川柳の中から 158 句を選んでいる。ここでは3つの句を紹介する。子育ては良くも悪くも母親の関与が深く影響していることが伝わってくる。著者の解説の妙味は本書を実際に紐解き感じ取っていただきたい。

柿の木の下へ 気付けをもって駆け
寝ていても 団扇の動く親心
母親は 息子の嘘を足してやり

本書は、古川柳の解説のほか、里親制度の統計データや里親養育の理解につながる記事が掲載された「コラム」と著者の家庭で育った里子のリアルな子育てのエピソードが掲載された「点描」で構成されている。本書は読者が古川柳に描かれた子育ての姿に触れるとともに里親制度、里親養育の現実を理解する書ともなっている。多様な家族の在り方が模索されている現代日本社会の家族と子どもの関係性を考察する上で本書は貴重な良書である。日本子ども支援学会の会員の皆様に一読を薦めたい。



2020 年 グッドタイム出版

[目次へ](#)

編集後記

紀要『子ども支援研究』第4号をお届けします。
本号には、『風の便り』6月号、6月臨時増刊号、
9月号の実践報告から3編、研究ノートから3編を
収録しました。Book Review は本会会員の青葉紘宇
氏の著書『「継ぎ接ぎ家族」を楽しむ』です。

お忙しいなか、原稿をお寄せいただいた方々に心
より御礼申し上げます。

長引くコロナ、拡大し長期化するロシア・ウクラ
イナ戦争、にわかに浮上した宗教問題、台風のたび
ごとに列島各地の蒙る甚大な被害、子どもにかかわ
る事故や犯罪の多発等々、数え上げれば気が滅入る
ばかりの出来事が続いています。

このような出来事について、子どもたちは、何を
感じ、どう考えているのだろうか、気になるところ
です。

コロナの影響もあって、ネット空間が盛んに活用
される一方で、学校や日常生活での接触の機会が十
分に持たれているのだろうか、規制は少しずつ緩和
されて、日常の活動も再開されているようですが、
わが国では、いまだにマスク着用が必要で、将来へ
の影響も心配されます。マスクを外すのが不安だ、
というようなことにならないことを祈るばかりで
す。(市原)

紀要編集委員会

○編集委員長

市原 潤 (保護司・元長野県公立高校長)

○副編集委員長

上 島 博 (こども支援士・元小学校教諭)

○編集委員 (五十音順)

赤 藤 和 仁 (東京成徳高校教諭)
上 原 秀 一 (宇都宮大学准教授)
内 山 絢 子 (前 目白大学教授)
河 村 圭 (育英幼稚園副園長)
熊 澤 幸 子 (昭和女子大学名誉教授)
清 水 陽 子 (九州産業大学教授)
杉 森 伸 吉 (東京学芸大学教授)
深 谷 野 亜 (松蔭大学教授)
由 田 の ば ら (東京成徳高校教諭)
吉 野 真 弓 (育英短期大学准教授)
米 谷 茂 則 (明治大学講師)

○編集参与

深 谷 昌 志 (会長・東京成徳大学名誉教授)
深 谷 和 子 (ニューズレター委員会委員長・
東京学芸大学名誉教授)
金 城 悟 (事務局長・東京家政大学教授)

子ども支援研究 第4号

The Japanese Journal of Child Care and Support

2022 年 10 月 10 日 発行

編集 日本子ども支援学会 紀要編集委員会

発行 日本子ども支援学会

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学 金城悟研究室気付 日本子ども支援学会事務局
E-mail : info@kodomoshiengakkai.com
HP : <http://kodomoshiengakkai.com/>

©日本子ども支援学会 2022